

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金  
 大学院生研究 2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学	研究科 コミュニティ福祉学	専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	コミュニティ福祉学部・教授	福山 清蔵	
研究課題名	介護における高齢者夫婦の心中に関する研究—ジェンダーに焦点を当てて—		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	コミュニティ福祉学研究科・コミュニティ福祉学専攻・2年	柳 ジョンヒ	
研究期間	2011	年度	
研究経費	100	千円	

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究に介護における高齢者夫婦に心中に関する研究である。筆者は新聞記事を分析資料として用いて内容分析を行い、高齢者心中と介護殺人事件に絞り込みその要因について検討した。結果、特に注目すべき事柄として三つの点を得られた。今回の分析で最も顕著な傾向は①高齢者夫婦の心中と殺人事件の中で加害者は男性が多く、被害者は女性が多い点。②老夫婦への家族の安否確認が6割弱あったにも関わらず、介護は老夫婦だけのものになり、心中・殺人事件に至った点。③介護を始めてから心中に至るまでの期間は、男性介護者の方が、女性介護者より相対的に短かった点の以上の三つである。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 高齢者夫婦 ] [ 心中 ] [ 介護 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

## 研究方法

① 先行研究と同様に新聞記事を分析資料として用いて内容分析を行った。記事データベースはヨミダス歴史館(読売新聞)と聞蔵Ⅱビジュアル(朝日新聞)を用いて対象となる記事の検索を行った。朝日新聞では「介護」と「心中」を入れて検索を行い、読売新聞では「心中」と「老夫婦」を入れて検索を行った。② 検索は2010年6月に行った。その結果、出てきた記事が朝日新聞では592件、読売新聞では87件あった。その抽出された記事から加害者と被害者との続柄を高齢者夫婦に絞り、心中に至る主な要因が介護と見られる事件を選び出した。介護にまつわる高齢者心中かどうか確認出来ないものは研究対象から除外した。心中事件は加害者と被害者の両方が死に至ることを意味するが、本研究では、被害者が生き残った場合と加害者が生き残った場合、双方生き残った場合も含めて分析を行った。また、介護保険制度導入との関連を見るために介護保険が施行された2000年を基準にして、介護保険制度が施行される2年前の1998年から2011年の間に発生した心中事件の概要を調査した。このような方法で抽出された記事をもとにして、加害者・被害者性別比較、年齢による事件数、加害者性別による事件の動機、要介護状態にあるものと加害被害の生別、介護保険制度の利用有無と心中の関連、介護期間の性別比較、家族の安否確認、遺書の有無、発見された場所、発見者、殺害及び自殺手段等について調べた。

## 結果

1998年から2010年の間に生じた介護にまつわる高齢者(50代も含む)夫婦の心中事件は朝日新聞(87件)、読売新聞(38件)合わせて125件あった。125件の中、夫が妻を殺害する事件は81件(65%)、妻が夫を殺害する事件は43件(35%)あった。(表1)加害者の性別がはっきり分からない事件も1件あった。先行研究においても明らかになったように、今回の研究結果も女性より男性の方が加害者である事件が多かった。年齢別加害者の割合をみるとどちらの性別とも70代の加害者が多かった。男性は80代の加害者も多かったが、80代の女性の加害者は4件しかなかった。年齢別男性の被害者は男性の場合は70代が多くを占めている反面、女性では80代が一番多くその次が60代であった。心中に至る主な動機は男性と女性どちらも介護疲れが最も多かった。男性は介護疲れが58件(72%)、加害者病気を悲観して生じた事件は4件(5%)、被害者の病気を悲観して生じた事件は5件(6%)、双方の病気を悲観して生じた事件は1件(2%)、将来を悲観しての事件は2件(3%)、経済的問題が4件(5%)、不明は6件(8%)あった。女性の加害者では介護疲れが38件(91%)と最も多く占めており加害者の病気を悲観して生じた事件は0件であった。被害者の病気を悲観して生じた事件は1件(2%)、双方の病気を悲観して生じた事件0件、将来悲観も0件で、経済的問題が1件(2%)、不明が2件(5%)であった。要介護状態が加害者と被害者どちらに見られるかを調べた結果、男性加害者の場合、女性が要介護状態にある事件が56件、双方に見られる事件は16件、不明の事件は10件であった。女性が加害者である場合は、男性が要介護状態にある事件が36件、双方に見られる事件は6件あった。介護保険の利用有無は、介護保険を利用していた家庭は34件(27%)あり、利用していない家庭は4件あった。また、新聞記事では利用有無について言及していないものが多かったので不明が87件(70%)で最も多かった。介護を始めてから心中に至るまでの期間は、男性加害者の方が女性加害者より相対的に短かった。男性介護者は介護をはじめから3年～5年未満の間に生じた事件が22%で最も多く、女性加害者は5年～10年未満の間に発生した事件が15%で最も多かった。今回分析対象になった家庭は高齢者夫婦のみの世帯が多いが、家族(娘、息子)が安否確認をしていた家庭は58%あり、していない家庭は5%であった。していかどうか確認出来ない家庭は37%あった。次に遺書の有無であるが、遺書が残っている場合には、心中を前から計画していた可能性が高いと言われている。本調査では、遺書があった事件は64件で4割を占めており、なかった事件は38件であった。また、記事からは遺書の有無がはっきり分からない事件も53件で4割近く占めていた。発見者では、家族の安否確認が58%と6割近く占めていることから予測できるように家族に発見された事件が64件(51%)で最も多かった。ホームヘルパに発見された事件は14件、知人や近所の人に発見された事件は11件であった。発見場所は加害者被害者ともほとんど自宅(加害者81%、被害者89%)であった。自宅で発見された加害者の殺害手段には首つりが34件で最も多く、次には刃物による自殺が22件あった。被害者の殺害手段には絞殺が60件を占めており、刺殺が10件、殴打が2件であった。被害者の殺害

### 研究成果の概要 つづき

手段には絞殺が 60 件を占めており、刺殺が 10 件、殴打が 2 件であった。外で発見された加害者の自殺手段には飛び降り、水死、焼身自殺の順で、被害者の場合は水死、一酸化炭素による中毒の順である。

### 考察

本研究から得られた結果の中で、特に注目すべき事柄は次の点である。今回の分析で最も顕著な傾向は①高齢者夫婦の心中と殺人事件の中で加害者は男性が多く、被害者は女性が多い点である。②老夫婦への家族の安否確認が 6 割弱あったにも関わらず、介護は老夫婦だけのものになり、心中・殺人事件に至った点である。③介護を始めてから心中に至るまでの期間は、男性加害者の方が女性加害者より相対的に短かった点である。羽根は継続的な介護を困難にする原因として、夫婦の場合は年齢に伴い身体の調子が悪くなり、介護が心身に大きな負担になった事例もあると言っている。(羽根, 2006) 子どもの場合は経済的な困窮が一因だと思われる。上に述べたように心身の疲弊や経済的困窮が介護を続けようとする気持ちを揺さぶる一因となり、事件に至ったのではないかと推測できる。介護殺人・心中事件の加害者となった男性加害者の多くは介護を肯定的に受け入れたものの、介護の継続を困難にする要因が生じた場合、反動のように事件に至ってしまうハイリスクな状態に陥るのではないかと思われる。夫が犯行に至る際には妻の意見も自分の意見と同一視する傾向もあり、自分自身の人生の犠牲感も事件の一因となった可能性がある。(新名, 1992; 松岡, 1993) 要介護状態の親族を介護する者にとって、性別や続柄がその者の感じる困難にどう影響するのか考察することは重要であろう。男性の場合、家事や介護を担うことを特別にする傾向も、事件の一因であると思う。男性(夫・息子)の心身の負担や経済的な負担などの介護の継続を困難にする要因は、男性介護者の特有なものではない。妻や娘が介護する場合、それとの本質的な違いはないはずである。羽根は周囲からの評価や介護や自身が内面化しているジェンダー規範によって精神的に孤立し、「介護ホリック」と言える状況になりかねないといった。(羽根, 2006) このような家事や介護を担うことを特別にする傾向が強い男性が比較的に女性より介護ホリックになり、事件に至ったケースが多いのではないかと考えられる。介護を始めてから心中に至るまで男性加害者の方が女性加害者より相対的に短かった理由は男性が家事役割や介護役割に慣れていないため、より大きなストレスを抱えてしまったと推測されると羽根は述べている。介護ホリックの状態で介護を継続困難となる要因が発生すると介護意欲をそがれ目的を失い、殺人・心中に至るリスクが高まると考えられる。つまり、男性介護者が女性介護者よりも殺人・心中事件に追い込まれやすい要因は「介護を継続困難にする要因」ではなく、男性介護者が「介護ホリック」の状態に陥りやすいということがあるのではないかと思われた。

### おわりに

本研究では新聞記事を用いた分析により、高齢者心中と介護殺人事件に絞り込みその要因を考察した。高齢者の介護は育児と違い、日々の成長ではなく、日々老いていく姿をみるものであり、介護を献身的に行ってもいずれは終末を迎えることになり、その過程で喜びを得ることは少ないという特徴がある。(上田, 2001) 親族の要介護状態で介護者は精神的葛藤に陥りやすい。その場合、援助者による支援が単なるサービス導入のみで終わっては本当に彼らの介護負担を軽減したことにはならない。介護殺人などの事件加害者はその多くが介護に伴う困難が発生するまでは地域で特に犯罪に関わることなく日常生活を営んでいた人たちである。そのような彼らがこのような事件を起こしてしまうところに介護問題の深刻さがある。今までの事件を分析し、これから浮かび上がる課題の克服策を考えることは事件の防止のみならず、高齢者福祉全体の向上を目指すことが重要であろう。新聞記事のみを資料としたため、本研究の結論は資料分析による推測の域を出ない部分が多いがこれからは本稿ではどのようなものが介護疲れを引き起こしたのか、どのような要因が影響をしているのか心中に至るまでのプロセス等の得られなかった知見を裏付けるよう研究を進めたい。

### 参考文献

- ・羽根文「介護殺人・心中事件にみる家族介護の困難とジェンダーの要因—介護者が夫・息子の事例から—」家族社会学研究、(18)第1号:27-39、2006年
- ・上田照子「家族介護者による不適切処遇の背景とその予防」労働の科学、(56)5:8-22、2001年